

研究題目 「やってみたい！」という思いをもって、友達とかかわりながら イメージを広げる子の育成

～小学5年『紙から生まれる わたしの明かり』の実践から～

1 研究のねらい

図工・美術部会では、子どもたちの「やってみたい!」「もっとこうしたい」という思いを引き出し、友達とかかわりながらイメージを広げる子の育成をめざし、研究を実践してきた。

10月に行われた「GAMA ハロウィン」(地域のお祭り)では、一人一つ育てたカボチャを使い、ジャックランタンをつくった。カボチャに目と口を彫り、ハロウィンイベントの飾りとして、蒲郡駅前の広場に展示した。展示された作品を見た子どもたちは「ランタンのおかげでハロウィンっぽくていいね」「中に明かりを入れて本物のランタンみたいにしてみたい」と話し、もっと明かりを活かしてつくってみたいという思いをもった。しかし、カボチャは彫るのが難しく、形やデザインにも制約があり自由にデザインできなかったため個々の表現が広がらず、自分らしい作品をつくりたいと試みる子が少なかった。



【資料1】カボチャのランタンづくりの様子

このことから、子どもたちには「明かりを活かして自分の表現を広げてほしい」と思い、材料の特徴を生かしたり、友達とかかわったりしながら、もっと自分の表現を広げ、自分だけの明かりを工夫してつくってほしいと考えた。

そこで、今回は紙とLEDライトを使って、自分だけの明かりをつくる授業を構想した。紙は子どもたちにとって身近で簡単に加工することができる材料であるため、思い描いたアイデアを実現するのに適していると考えた。固さや光の透け方が違うさまざまな種類の紙を用意することで、紙の切り方や組み合わせ方、透かし方や重ね方などをさまざまに試すことができるようにする。制作するなかで、光と影の美しさを味わってほしい。また、鑑賞活動を取り入れることで友達の表現のよさを見つけ、自分の表現に活かしてほしいと願い、本研究に取り組んだ。

2 研究の概要

(1) めざす子どもの姿

- ◎「自分だけの明かり」をつくりたいという思いをもって、紙から生まれる明かりのよさや美しさを感じながら、主体的につくりだす子
- ◎友達とかかわることを通して、自分や友達の作品のよさや工夫に気づき、表し方を試しながらイメージを広げ、作品づくりをする子

(2) 研究の仮説と手だて

仮説Ⅰ 子どもたちの「自分だけの明かりをつくりたい」という思いをもたせるために、授業の導入を工夫し、明かりのよさや美しさを感じられるような環境づくりをすれば、自分らしい明かりを主体的につくることができるであろう。

手だてⅠ ア：作品のイメージをもち、「つくってみたい」と意欲を高める導入の工夫
イ：光を使って作品の出来具合を確認することができるように、お試し BOX を使う場の設定
ウ：つくりだす喜びや達成感を味わえる展示会

仮説Ⅱ 作品のイメージを広げるための場を設定し、ふり返りを工夫することで、自分や友達の仕事のよさや工夫に気づき、作品づくりに生かすことができるであろう。

手だてⅡ ア：いろいろな種類の紙を使い試すことができる材料コーナーの場の設置
イ：友達の仕事のよさや工夫に気づき、作品に生かしていくための中間鑑賞会
ウ：作品の変化やよさに気づき、次にイメージを広げていけるようにするためのふり返り

(3) 抽出児A児について

自分のつくりたいものを考えたり、表現したりすることが苦手で、好きなものや興味のあるテーマ自体はあるが、それをどのように形や色、材料を使って表現すればよいのかわからず、迷ってしまうことがある。9月に学習した「ワイヤーワールド」では、はじめは手が進まなかったが、友達の針金の使い方からひらめきを得て、自分の作品をつくることできた。「カボチャのランタンづくり」では、目や口の形が定まらず何度も描き直し、固いカボチャに苦戦しながらも彫り進めていった【資料2】。

本題材で、A児には友達とかかわり合いながら、自分が表現したい明かりを思いつき、さまざまな種類の紙を試しながらイメージをふくらませ、自分だけの明かりをつくる活動に取り組んでほしい。A児には好きなものや興味のあるテーマはあるものの、どのように表現したらよいか分からないという課題がある。そこで、身近であり加工しやすいさまざまな紙を材料にすることで、イメージに合う紙を選び、思いを具体的な形にし、自分だけの表現を広げていくことができると考えた。また、中間鑑賞会を通して友達の仕事のよさや工夫に気づき、さまざまな表現方法を試していけるようにしたい。「こんなふうにつくってみたい」という自分の思いを表現しながら、友達とかかわっていく中で表現の広がりを楽しみ、自信をもって、作品づくりをしていく姿を期待したい。



【資料2】カボチャをつくるA児



【資料3】駅前に飾られたランタン

3 単元構想

学 習 活 動	・ 教師支援
つくるのって楽しいな ・ かぼちゃでつくったランタンは目や口を掘るのが難しかったけど楽しかったよ ・ もっと細かい模様でランタンをつくってみたいな 紙の明かりってすてきだな① ・ 紙と光だけでもきれいな明かりができるね ・ 紙っていろいろな種類があるんだ、光の透け方もちがう ・ 紙を重ねていくと模様ができておもしろいな ・ 自分も明かりをつくってみたい！ わたしの明かりをつくりたい どんな明かりにしようかな②③④ ・ トレーシングペーパーは一番光が透けるね ・ やわらかい紙は、作品もやさしい感じになるね ・ 光と影で物語がつくれそうだよ ・ 隣の〇〇さんは紙を何種類か組み合わせているな 友達の明かりを見てみたい⑤⑥（中間鑑賞会） ・ 暗い部屋で明かりをつけるときれいだね ・ 紙を重ねて明かりに影で模様をつくっているんだ ・ 〇〇くんの紙をくしゃっとしたり破いたりする方法をまねしてみたい ・ 自分の作品の直したいところが出てきた！はやくつくりたい 明かりをもっと工夫したい！⑦⑧⑨ ・ 友達から学んだことも取り入れてみよう ・ もう少し高さを出すために、針金を支えにしてみよう ・ 中心の明かりのまわりに飾りを付けてみようかな 心を照らす明かりをつけよう⑩（展示会） ・ どの明かりも形や光の透け方が違ってすてきだね ・ △△さんと□□さんの作品はどちらも楽しさを表しているけど、明かりの形が違っておもしろいな ・ 学校や地域に展示してたくさんの人に見てもらいたい！	・ 明かりを使った作品をもっとつくりたいという思いをつなげるために、GAMA ハロウィンのランタンづくりの感想を伝え合う。 【手だてⅠーア】 ・ 作品のイメージをもち、子どもたちの意欲を高めるために、部屋全体を薄暗くした状態で、紙を使った明かりを提示する。 【手だてⅠーア】 ・ 材料の特徴を味わい、紙の切り方や組み合わせ方を試せるように、さまざまな種類の紙を用意し、材料コーナーを設置する。 【手だてⅡーア】 ・ 表したいことを見つけられるようにするために、紙を折ったり切ったりしながら、紙の固さや厚さをじっくり味わう時間を設定する。 ・ 子どもたちが試しながら作品づくりができるように、部屋を手元が見える薄暗さになるようにし、お試しBOXを用意する。 【手だてⅠーイ】 ・ 自分の作品をよりよくするために、友達と作品のよいところや工夫について話し合う中間鑑賞会を行う。 【手だてⅡーイ】 ・ 手直し前後の変化が分かるように、作品の画像を撮影し、ふり返る場を設定する。 【手だてⅡーウ】 ・ 友達の作品からさまざまな表現のよさや美しさ、思いに触れるために展示会を行う。 【手だてⅠーウ】 ・ 鑑賞会で、作品に込めた思いや工夫について友達に知ってもらうために、発表するときに作品に込めた思いや工夫点、見てほしい点を伝える。

4 実践と考察

(1)「つくってみたい」と意欲を高める子どもたち（Ⅰ-ア）

導入では、カボチャのランタンについてふり返ったあと、さらに明かりに意識を向けさせるために「身の回りにはどんな明かりがあるかな」と尋ねた。子どもたちは「この教室にある」「家には形がおしゃれなライトがある」「枕元に小さくて明かりが強くないライトがある」など身近な明かりについて気付いた。そこで、紙でできた明かりの写真をいくつか提示した【資料4】。



【資料4】紙でできた明かり

市内の旅館や、祭りで使われている明かりを見た子どもたちは「やわらかい雰囲気です旅館に合っている」「形がまん丸でおもしろい」「お祭りで見たことがある」など感想を伝え合った。歴史や大河ドラマが好きなA児は提灯の明かりを見て「大河ドラマに出てくる提灯に似ている」と声にした。また、明かりの材料に注目させるために「この明かりの共通点は何でしょう」と問いかけると「全部紙でできている」と気付いた。そして「紙ならいろいろな形の明かりがつくれそう」「紙でつくってみたい」という意見が出て、紙で明かりをつくりたいという意欲を引き出すことができた。

このように、題材の導入において、カボチャのランタンについてふり返ったことや、紙でできた明かりを提示したことで、子どもたちの「つくってみたい」という意欲を高めることができた。

(2) いろいろな種類の紙を試していくA児（Ⅱ-ア）

普通紙、和紙、トレーシングペーパー、画用紙など固さや光の透け方が異なる紙を用意し、子どもたちが試すことができる材料コーナーを設置した【資料5】。活動が始まると子どもたちは「紙を立たせるにはどうしたらいいかな」「厚い紙と薄い紙を組み合わせたらどうなるかな」と紙を折ったり、重ねたり、組み合わせたりして試し始めた。はじめは手が進まなかったA児も、トレーシングペーパーと画用紙を選び、折り始めた。周りの子が紙で立体をつくり、立たせようとしているのを見て、トレーシングペーパーを使って四角い筒をつくり始めた。しかしトレーシングペーパーでは固さが足りず筒が倒れやすいことに気付き、画用紙で四角い筒をつくらせて立たせた【資料6】。その後、別の種類の紙で筒のような立体をつくろうと取り組む姿が見られた。



【資料5】材料コーナー



【資料6】立体をつくるA児

このようにさまざまな種類の紙を用意したことで、子どもたちは材料の違いを比べながら、たくさん試し、紙の特徴を味わう姿が見られた。材料を自由に試せる環境を設定することで、子どもたちは紙の特徴を味わいながら立体表現へとつなげていくことができた。

また、アイデアスケッチはあえて行わず、子どもたちがさまざまな材料に実際に触れたり試したりしながら制作を進める活動を設定する。材料とのかかわりのなかで新たな発想を生み出し、自分の思いやイメージを柔軟に広げながら、一人一人が自分だけの表現による作品づくりに取り組めるようにする。

(3)「お試しBOX」を使って作品づくりをするA児（Ⅰ-イ）

子どもたちは、さまざまな種類の紙を使って明かりづくりに取り組み始めた。光の透け具合や紙の透かし方を試しながら表現できるようにするために、「お試しBOX」【資料7】を用意した。箱同士を合わせて内部を完全な暗闇に近い状態にすることで、その中に明かりを入れた際、光がどのように透けて見え



【資料7】お試しBOX

るのかをはっきりと確認することができた。はじめは二つの箱の中に作品を入れて確認していたが、子どもたちは「上にも箱を置けばもっと暗くなる」と考えて箱を組み合わせ、より暗くした箱の中で光を使って作品の出来具合を確かめた。A児も「お試し BOX」を使い、作品を確認していく姿が見られた。「お試し BOX」を使うことで、光の透け具合を具体的に把握でき、作品の課題や修正したい点を自ら見つけることができた。「お試し BOX」を活用し、明かりのよさや美しさを感じられるような環境づくりしたことで、子どもたちが自分だけの明かりを主体的につくっていくことにつながった。

（４）友達との中間鑑賞会で気が生まれるA児（Ⅱ-イ）

友達作品に興味を示し作品をのぞき込む子どもたちが増えてきた。中にはシンプルな形で満足してしまい、工夫を加えて表現を広げることに気付いていない子どももいた。A児もその一人であり、模様が何もないシンプルな筒状の明かりを作り、手が止まっていた【資料8】。



【資料8】A児の作品

【資料9】中間鑑賞会

中間鑑賞会は暗闇にすることができる校内のホールで行った【資料9】。明かりを準備しホールの照明を消すと子どもたちはクラス全員の作品の美しさに「すごい！きれい！」と思わず声をあげた。ワークシートを用意し、自分の作品についてと友達作品の工夫やよいところ、気付いたことを書けるようにした。子どもたちは夢中になって作品を見て回った。A児は中に厚紙を貼って影をつくった友達の作品を見つけ「Bくんの明かりは黒い模様がある」とつぶやいた。「どうして模様になっているのかな」と尋ねるとA児は考え始めた。横で見ていた友達が「紙をはっているからじゃない？」と言うと、「明かりの中に紙をはって、そこが模様になってるんだ」と影の表現に気付いた。A児はワークシートに「Bのが紙を中にはってそとだけくろく見える。」と書いた。そして、自分の作品について「シンプルすぎたからもうとかを付けたい」と書き、作品をよりよくしたいという思いが出てきたことがわかる【資料10】。

B	の紙を中にはってそとだけくろく見える。
<自分の作品を見て> 5年	A
シンプルすぎたからもうとかを付けたい。	

【資料10】中間鑑賞会のA児のワークシート

鑑賞会后、A児は新たに四角い筒の明かりをつくり始めた。B児の作品【資料11】で紙を中に貼ることで模様になることに気付いたA児は、筒の内側に四角く切った紙を貼って模様をつくった。また、新しく作り始めた明かりに四角く穴をあけ、中から光がもれるようにした。このように、中間鑑賞会をしたことで、友達作品から工夫を学び、自分の作品をよりよくしようと活かす姿につながった【資料12】。

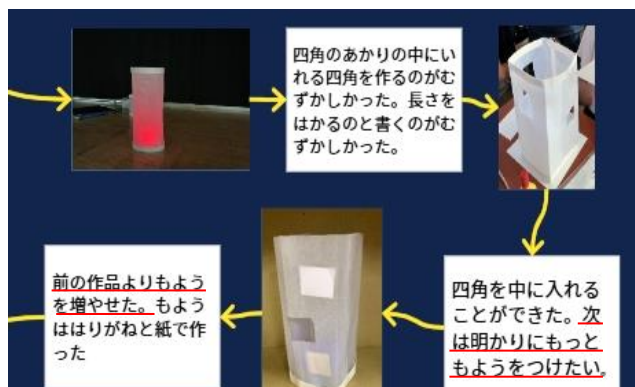


【資料11】B児の作品

【資料12】模様をつけた作品

（５）前回の作品と比較して活動をふり返るA児（Ⅱ-ウ）

手直し前後の作品の変化を捉え、次にイメージを広げていけるよう、写真とふり返りをつなげられるタブレット端末のアプリケーション（ロイロノート）を活用した。A児はふり返りに「あかりの中に入れる四角を作るのがむずかしかった。長さをはかるのと書くのがむずかしかった」と書いており、次の授業では前時に正方形に切った画用紙を明かりの中に入れ、「四角を中に入れることができた。次は明かりにもっともようをつけたい」とふり返った【資料13】。



【資料13】A児のロイロノート

その次の授業では、紙を細かく切って形をつくり、明かりに模様をつけ「前の作品よりもようを増やせた」と前の作品と比較しながらふり返っていることがわかる。ロイロノートに写真を載せてふり返ることで、次へイメージを広げて作品づくりをしていくことができた。

（6）作品を展示して喜びを感じるA児（I-ウ）

「完成した作品を蒲南ホールに並べて見たい」と多くの子が友達の作品を楽しみにしていたので、展示会を行った。子どもたちは中間鑑賞会後から改善したり工夫が増えたりした作品を鑑賞した。A児は「もようをつけてよかった。みんなの明かりもそれぞれがちがうよさがあった。細かいところはむずかしかったけど何回も作り直してできてうれしかった」とふり返りに書いた。「みんなの明かりもそれぞれがちがうよさがあった」という言葉からは、友達とかかわりながら友達の表現のよさを見つめることができたことが分かる。また、「何回も作り直してできてうれしかった」という言葉からは作品をつくりだす喜びを味わえたことが分かる【資料14】。

もようをつけてよかった。みんなの明かりもそれぞれがちがうよさがあった。細かいところはむずかしかったけど何回も作り直してできてうれしかった。

【資料14】A児のふり返り



【資料15】A児の作品

5 研究のまとめ

（1）研究の成果

仮説Ⅰについて

導入でカボチャのランタンについてふり返ったり、紙でできた明かりを提示したりしたことで、子どもたちに「自分だけの明かりをつくりたい」という思いをもたせることができた。「お試しBOX」を使って、明かりのよさや美しさを感じられるような環境づくりをしたことで、子どもたちが明かりを主体的につくっていく姿が見られた。最後に、完成した明かりを飾る展示会を設定したことで、つくり出す喜びを味わうA児の姿が見られた。以上のことから、仮説Ⅰの手だては有効であったといえる。

仮説Ⅱについて

いろいろな種類の紙を使い試すことができる材料コーナーを設置したことで、子どもたちは紙の特徴を味わい、作品づくりへとつなげていくことができた。また、友達と関わる中間鑑賞会を設定したことで、友達の作品のよさや工夫に気づき、作品づくりに生かすことができた。さらにロイロノートで作品の変化を捉えられるふり返りをしたことで、次にイメージを広げながら作品づくりをするA児の姿が見られた。以上のことから、仮説Ⅱの手だては有効であったといえる。

（2）今後の課題

中間鑑賞会后、意欲的に作品づくりに取り組む子どもたちが多い一方で、思いをもつことが難しかった子もいた。アドバイスをしても今の状態で満足しているため、その後の授業で作品の変化が見られなかった。そういった子どもへの声かけを工夫していくことが必要だと感じた。

6 終わりに

地域学校協働活動推進委員と連携し、蒲郡駅の観光交流センターナビテラスに全員の明かりを展示した。

【資料16】見に行った子たちは「全員の明かりが並んできれいだった」「夜だから明かりが合っていた」と嬉しそうに話していた。

今後も「やってみたい!」という思いを大切に、友達とかかわりながらイメージを広げることができる子の育成を目指していきたい。



【資料16】ナビテラスでの展示